

令和元年6月11日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02621

研究課題名(和文) 英語史におけるポライトネス・ストラテジーの変化と原因

研究課題名(英文) The change and cause of politeness strategy in the history of English Language

研究代表者

福元 広二 (FUKUMOTO, HIROJI)

広島修道大学・商学部・教授

研究者番号：60273877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中英語期から後期近代英語期にかけて、各時代のポライトネス・ストラテジーが通時的にどのように変化しているかを考察した。その結果、依頼表現においては、次第に助動詞を用いる表現が増加していくこと、また呼びかけ語もポライトネスと密接に関連があることも明らかになった。さらに、謝罪表現や約束表現においても、時代ごとに用いられる表現が異なることを明らかにした。各時代において、相手との心的距離を離したり縮めたりするためにポライトネス・ストラテジーが巧みに使用されていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、英語史におけるポライトネス・ストラテジーの変化に焦点を当てた。これまでの研究では、ある特定の時代における個別の一人の作家の作品をデータとした考察が多かったが、本研究では、英語史という広い視点から、各時代におけるポライトネス・ストラテジーの一般化を明らかにしたことが特色となる。それぞれの時代において、話し手と聞き手との心的距離を離したり縮めたりするために、様々なポライトネス・ストラテジーが用いられていることを明らかにした点で意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research explored the change in politeness strategies from the Middle English period to the late Modern English period. In order to study it, I examined how politeness strategies functioned by analyzing the expressions of requests, vocatives, apologies and promises in each period. In the results, concerning requests, I concluded that expressions with auxiliaries gradually increased. Vocatives were strongly related to politeness strategies in each period. There were a variety of expressions for apologies or promises in each period. In conclusion, I found that a lot of politeness strategies are skillfully used to open or close the psychological distance between the speaker and the listener in the period under study.

研究分野：英語学

キーワード：ポライトネス 歴史語用論

1. 研究開始当初の背景

ポライトネス理論の研究は、1970年代から R. Lakoff (1975)、G. Leech (1983)、Brown and Levinson (1978, 1987)らのポライトネスに関する原則や理論が登場して以来、日本語や英語のような言語学のみならず、社会学、文学、心理学、教育学などの分野においても幅広く利用されてきた。言語学においても、特に、近年の語用論の発展に伴って語用論学会や社会言語学に関する学会において、数多くの研究発表が行われてきた。

ポライトネス研究は、これまで現代語をデータとする共時的な研究がほとんどであったが、最近では、海外において、歴史的データを利用して、ポライトネス理論を歴史言語学に応用しようとする研究が行われるようになってきた。(Jucker 2012, 2013)。国内においても、各個別の作家の作品を用いて、Brown and Levinson の理論に当てはめている研究もみられるようになってきた。しかし、英語史全体を見渡した研究はなかったため、申請者は、国内で初めての英語史におけるポライトネスの変化をとらえるシンポジウムを企画し、日本英文学会中国四国支部第66回大会(2013年10月20日(日)於山口大学)で、「英語史における Politeness 研究の可能性」というテーマのシンポジウムで司会と講師を務め、中英語から後期近代英語までの通時的変化を見た。

国外においては、ポライトネス理論の研究は国内以上に盛んに行われている。国際学会でもこれまで、国際語用論学会などの学会で活発に研究発表が行われている。研究書もこの数年で数多く出版されるようになった。Jucker and Taavitsainen(2013) *English Historical Pragmatics*. Culpepper (2011) *Impoliteness*. Bouchara (2009) *Politeness in Shakespeare: Applying Brown and Levinson's politeness theory to Shakespeare's comedies*. Culpepper and Daniel (eds.) (2010) *Historical (Im)politeness*. 最近では、英語だけでなく、さまざまな言語をデータとした論文集も出版されるようになり、最近のポライトネス研究の関心の高さを物語っている。

申請者は、これまで英語史における語用論標識を文法化・主観化の観点から研究を行っており、2008年にはイギリスのシェフィールド大学で開催された PALA28(第28回国際文体論学会)、2009年には、オーストラリアのメルボルン大学で開催された第11回国際語用論学会、2011年には大阪大学で開催された Middle and Modern English Corpus Linguistics 2011などの国際学会において、語用論標識や Comment clause を文法化の観点から研究発表を行ってきた。これまでの語用論標識の研究の中で、ある言語項目の通時的変化のメカニズムには、話し手と聞き手の社会的関係や相手への配慮など主観化や間主観化の視点も重要であると感じた。

そこで本研究では、Jucker(2012)に触発され、相手への配慮に応じた言語行動であるポライトネス・ストラテジーを通時的に考察してみる必要性があると感じた。

2. 研究の目的

本研究では、Brown and Levinson の枠組みを中心に、英語史におけるポライトネス・ストラテジーの変化とその原因を考察するのであるが、ポライトネスの概念はあまりにも広いので、すべてを扱うことは不可能であるため、平成27年度から平成30年度までの4年間を研究期間に定め、各年度でだいたい一つのテーマを扱うこととする。

これまでの英語史におけるポライトネス研究で使用されているテーマはほぼ決まっており、国内においても、国外においても、呼びかけ、依頼表現、you と thou のような2人称代名詞、発話行為動詞などがそのほとんどであった。また、データとなる作品についても、個別の作家

または、一つの作品だけを取り上げて、Brown and Levinson のポライトネス・ルールに当てはめたものが多かった。

そこで、本研究においては、従来のような、個別の時代、個別の作家という視点ではなく、4年間という期間に、中英語期から後期近代英語期にかけての調査を行うこととし、また、言語項目においても、ある一つの項目だけを取り上げるのではなく、歴史語用論の枠組みで function to form mapping と呼ばれている、ある機能に着目し、その機能を表す表現形式が中英語期、初期近代英語期、後期近代英語期の中で、どのように表れ、どのように変化しているかを明らかにすることとする。取り上げる機能としては、「依頼表現」「敬意表現」「約束表現」「謝罪表現」「感謝表現」に絞って分析を行う。これらの機能を表すために、話し手が聞き手との社会的関係に配慮しながらどのような表現を用いて意図を達成しようとしているかを考察する。

研究期間の4年間において、まず1年目の平成27年度については、「依頼表現」について、中英語期から後期近代英語期までの調査を行う。2年目の平成28年度については、「敬意表現」についてそして平成29年度については、「謝罪表現」「感謝表現」について、そして、最終年度の平成30年度においては、「約束表現」における調査を行い、最終的に全体的なまとめを行う。

3. 研究の方法

本研究の研究計画としては、中英語期から後期近代英語期にかけてのポライトネス・ストラテジーの変化を考察するために、4カ年に分けて研究を行う。1年目の平成27年度については、「依頼表現」について、平成28年度については、「敬意表現」について、そして平成29年度については、「謝罪表現」「感謝表現」そして最終年度の平成30年度においては、「約束表現」における調査を行い、最終的に全体的なまとめを行う。

研究方法としては、中英語期から後期近代英語期にかけての文学作品と史的電子コーパスを精読しながら、各時代毎にその機能を表している表現を収集していく。そして、話し手と聞き手との社会的な関係を考慮しながら、Brown and Levinson のどのストラテジーに当てはまるかを分類していく。そして、最終的に英語史におけるポライトネス・ストラテジーの変化をまとめる。

4. 研究成果

本研究は、平成27年度から平成30年度にかけて「英語史におけるポライトネス・ストラテジーの変化と原因」というタイトルで、中英語期から後期近代英語期にかけて、各時代の人々がどのようなポライトネスに配慮した話し方をしているかを明らかにし、さらには通時的にポライトネス・ストラテジーがどのように変化したかを考察した。

平成27年度においては、中英語期から初期近代英語期における「依頼表現」のデータを収集した。中英語期では、法助動詞を用いた Could you ~ や Would you please ~ ? といった表現はまだ発達していない。当時は pray などの動詞を用いて、I pray の表現形式が多く見られた。初期近代英語期においてもその傾向が見られるが、後期近代英語期になると次第に法助動詞が発達してきて、法助動詞を用いた表現が増加する。ポライトネスの観点から、Brown and Levinson のポライトネス・ストラテジーに従い、ポジティブ・ストラテジーに相当するか、またはネガティブ・ストラテジーに相当するかを分類した。

平成28年度においては、「敬意」を表す言語表現を、中英語期から後期近代英語期までの文

献から収集した。具体的には、目下である話し手が目上である聞き手に対して、または、対等な相手に対して、どのような場面で、どのような敬語または丁寧表現を用いているかを調査した。初期近代英語期の劇作品においては、敬語というよりも、呼びかけ語に特徴があり、ファーストネームだけではなく、タイトルなどとともに使われている例が多く見られた。ポライトネスの観点からは、呼びかけ語に関しては、非常に丁寧であるが、伝達形式に関しては、ポジティブポライトネスを表しているような例も見られ、呼びかけ語は一種の役割語としての機能もあることが明らかになった。

平成29年度においては、主に、「謝罪表現」を取り上げて、中英語期から初期近代英語期までの表現を収集して考察した。中英語期でも多くみられたのが、Pardon me や You pardon me のような2人称代名詞が主語となる表現であり、話し手が聞き手より力を持っている時や、話し手と聞き手とが対等な場合などに見られた。これは初期近代英語期においても同様であった。また、相手に配慮するときは、pardon me の前に I pray you のような表現を付加して、I pray you pardon me. のような表現も見られた。また、I am sorry の表現は通時的に見ると、次第に増加する傾向が見られた。歴史的にみると、You pardon me のような2人称主語から I am sorry のような1人称主語へと変化していく傾向が見られた。

平成30年度においては、話し手が聞き手に対する「約束表現」における調査を行った。発語内行為として「約束」の機能を果たしていると思われる動詞と1人称人称代名詞が結びついている表現を拾い上げた。中英語期においては、あまり「約束」の機能を果たしている表現が少なく、I plight you(thee)のような表現がみられた。ポライトネスの観点からは、ポジティブ・ストラテジーにもネガティブ・ストラテジーにも分類できないような例が多くみられた。初期近代英語期になると、I promise you の表現が次第に増加するという傾向がみられた。そのほかにも I swear や I warrant you のような様々な動詞がみられるようになった。このような「約束」という機能を表す表現を使用する話し手と聞き手との社会的関係を親子、夫婦、恋人、兄弟、友人というような観点からみると、それぞれの場面において、相手との心的距離を離したり縮めたりするために「約束」表現もポライトネスの一環として用いられていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Fukumoto Hiroji "A pragmatic study of tag questions in Shakespeare"
Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi (eds.)
The Pleasure of English Language and Literature 溪水社 査読有 2018年 pp.15-26.

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

福元広二「第6章 Shakespeareの英語」片見彰夫・川端朋広・山本史歩子(編)
『英語教師のための英語史』 開拓社 2018年 pp.133-158.

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。